

日中文化交流史研究の将来——日中学術交流史と比較中国学——

藤田高夫

一

近年我が国の東洋史学界では、国際シンポジウムが目白押しである。COEや科学研究費補助金などのプロジェクトがそれを要請するという事情もあるだろうが、わずか十年前の状況を考えてみれば、まさに隔世の感がある。そうしたシンポジウムには当然のことながら、中国・台湾の第一線の研究者が報告者・パネラーとして招聘され、それまで活字を通じてしか知遇を得なかつた先生たちが、肉声で最新の成果を語られるのを拝聴する機会が格段に増えたことは、もちろん喜ばしいことである。

また、中国をはじめとする海外での国際学会に我が国の東洋史学者が参加し、そこで自らの研究を披瀝することも、現在では当たり前のように行われている。我が国と中国だけに話を限定すれば、日中両国の学术交流は、二十一世紀に入つてかつてない活況期に入つていると言つてよいのだろうか。

しかしながら、筆者にはこのような活況がそのまま今後の日中学術交流の充実につながっていくのか否かについて、一抹の不安を禁じ得ない。それは、ほぼ一世紀前、日中両国の学术交流が高揚期を迎えながら、結局は凋んでしまった事実があるからである。

いうまでもなく、日本における中国史研究は「外国史」研究の一つである。歴史研究を「自国史」と「外国史」に腑分けすることは、それ自体さほど意味のあることではないが、研究者の層、歴史情報へのアクセス、研究蓄積など、どれをとつても「自国史」の研究が「外国史」研究よりも厚みを有していることは、一般論として疑問の余地はない。しかし、日本の中国史研究の場合、「外国史」を研究しているのだという「覚悟」が、例えばヨーロッパ史やイスラム史の研究に比べると希薄に思われるのは、筆者の偏見であろうか。

中国文化が日本に与えた影響は、前近代においては決定的である。それゆえ、日本の中国研究が、他国のそれとは異なつた意味と

様態をもつことは、自然なことであろうし、中国文化研究には、日本文化研究と表裏をなす部分があることも首肯されるところである。にもかかわらず、筆者には日中文化交流史研究という学問分野の将来に対して、現状を樂觀的にとらえることをためらわせる問題が存在するように思われる。本稿はそうした問題の一部を取り上げながら、今後の日中交渉史研究の方向を探ってみようとする試みである。

二

ほぼ一世紀前の十九世紀末から二十世紀初め、日本における中国史研究を、中国側はどのように認識していたのであろうか。この問題を考える際に筆者がまず想起するのは、非常に特異な例ではあるが、一九一一年に章炳麟が羅振玉に与えた公開書簡である^①。そこで章炳麟は、日本の中国学者と深い交流を持ち、彼らの学術研究を高く評価する羅振玉をきわめて厳しく非難し、当時の日本の東洋史学者や漢学者の実名を挙げながら、その学が賞賛に値するようなものではないことを力説している。

もちろん章炳麟の発言の背後には、日露戦争後の日本のアジア政策に対する深い幻滅があり、革命思想家としての激情からする罵倒は、学術的評価とは別個のものであって、その文脈を読み違えてはなるまい^②。その後の日本の中国政策が、多くの中国人研究者をして、章炳麟の感情を共有せしめることになったことは想像に難くな

いではあるが、果たして政治的要素だけがその原因であらうか。

ここで時間を少しだけ遡り、日清戦争からしばらくのちの状況を考えてみよう。周知のように、一八九五年の日清戦争における清の敗北は、それまでの日本に対する中国知識人の認識を一変させる出来事であった。多くの留学生が「近代化」の方途を求めて日本を訪れ、日本からも、やがて日本の中国学を担うことになる人材が中国に滞在して教鞭を執っている。日本に対する中国のまなざしには、後の時代のような幻滅も反感も希薄であったといつてよからう。したがって、政治的要素を極小化して中国の側からの日本の中国研究の評価を観察するには、この時期が最も適切な時代ということになる。かたや、日本における中国史研究についていえば、この時期は従来の漢学とは異なり、近代歴史学の一分野としての東洋史学が立ち上がろうとする時期でもあった。ではこの形成途上にあつた日本の東洋史学を中国の学術界はどのように受け止めたのであろうか。

近代日本の中国史学がそれまでの伝統的漢学から離陸したことを告げる記念碑的業績が、那珂通世『支那通史』の刊行である。漢文で著されたこの書は一八九九年に羅振玉によって中国でも出版された。羅振玉は「序」の中で次のように言う。

我が国の歴史が我が同胞によって書かれるのではなく、他国の人によって書かれなければならなかったことは、恥すべきことである。

『支那通史』は元の前で途絶しているが、それは根本史料たる『元史』の粗漏甚だしいために、まず史料的問題の解決を那珂が痛感したゆえであるとされる。一方那珂は、一八九四年に、当時の中等学校の外国史教育について、西洋歴史と東洋歴史に分割することを提言し、東洋歴史について次のように述べている。³

東洋の歴史は支那を中心として東洋諸国の治乱興亡の大勢を説くものにして西洋歴史と相対して世界歴史の一半をなすものなり。

是まで支那歴史は歴代の興亡のみを主として、人種の盛衰消長を説かざれども、東洋歴史にては東洋諸国の興亡のみならず、支那種、突厥種、女真種、蒙古種等の盛衰消長に説き及ぼすべし。

ここで提唱されているのは、歴史的一体性をもって西洋と対峙する「東洋」の歴史である。それは中国を中心としながらも、中国王朝交代史に終始するものではなく、諸民族の織りなす歴史世界を描くものである。⁴このように構想された「東洋史」はまもなくいくつかの中等学校用教科書として結実するが、その代表が桑原隲蔵『中等東洋史』であろう。

桑原のこの書は、一八九九年に『東洋史要』として上海で刊行された。その序を書いたのは王国維であり、そこで王国維は「パミール

ル以東」で展開された歴史を扱う学問としての東洋史学の意義を紹介している。⁵しかしながら、そこで述べられる意義は、実は王国維の理解ではない。「吾師藤田学士、此書の大旨を論述し、国維に命じてその端に書せしむ」とあるとおり、当時上海の東文学社で教育にあたった藤田豊八の言をそのまま翻訳したものであって、王国維自身が「東洋史学」という枠組みをどのように評価していたのかは、残念ながらわからない。

王国維は、一九一一年の辛亥革命勃発にともない、藤田豊八の斡旋で羅振玉とともに京都に亡命してくる。当時の京都帝国大学には、内藤湖南・狩野直喜・鈴木虎雄ら、『支那学』を中心に活動した京都学派の創始者たちが現役で活動しており、彼らと王国維の親交はよく知られた事実である。しかし、桑原隲蔵との親交は、あるいは没交渉であったのかと思われるほど希薄である。また、『観堂集林』に集成された京都滞在中の王国維の仕事のみても、「東洋史学」という新領域と関わるようなものは見あたらない。その後の王国維の研究は、周知のように「国学」としての中国学の形成へと向かい、「東洋史」という領域とは接点を持たないまま推移していく。つまり、日本において形成されつつあった「東洋史学」は、王国維の学問的関心を惹きつけるものではなかったということになる。日本滞在中の王国維は、日本の学術界に対する自らの感情・評価を率直に述べることはなかったが、繆荃孫に宛てた一九一四年七月十七日の書簡の中に次のような言葉があることは注目されてよい。⁶

年初、蘊公（羅振玉）とともに『流沙墜簡』を考釈し、ならびに自ら清書に携わり、ほぼ三、四ヶ月、それにかかりきりでした。この事柄は漢代の史実にきわめて大きな関係を有しており、現存する数十通の漢碑ですら、これとは比べものになりません。東人（日本人）にはそれが分からないため、その中に古書が含まれていないことを残念がっています。史籍に記していないことを記している点で、古書よりはるかに貴重なものであることが分かっています。考釈は草卒に仕上げたものですが、私としては、地理の方面で裨益するところが最も多く、それ以外の制度や名物においてもかなりの収穫があったと感じています。竹汀先生（錢大昕）などの皆さんに筆を執らせたとしても、多分この程度に過ぎないでしょう。

この数行のなかに、当時の日本の中国学に対する学術的失望と中国における「国学」への自負があると見るのがちすぎであろうか。

三

一方、日本の東洋史学においては、そのなかで中国での歴史研究が占める位置が逆に揺らいでいたような観がある。近代史学としての東洋史学創生期の代表的研究者であった東京帝国大学の教授白鳥庫吉には、次のような発言がある。

東洋の事は東洋の人で研究するのが便宜でもあり至当でもあるに、還つて西洋の学者に先鞭をつけられて東洋学の領土が政治界に於けるが如くに侵略せられ蹂躪せられたと観ずれば亦憤慨に堪えぬ次第である。只今東洋の諸国は衰えて死につくばかりの有様であれば、此等の国々の学者に向かつて斯の学の振興を望むのは或いは無理な注文であるかも知れぬ。然し我が国の如き：殊に東洋学に於いては彼をも凌駕してその欠陥を補う程の抱負がなくてはならぬ。：茫漠たる此の学界を見渡すに未だ西洋学者の手をつけない題目もあるし、よしや手をつけても未だ研究の足らぬ学科もある。現に亜細亜の北部に拠った戎狄の研究などは確にその中の一科である。

西欧の学者が東洋の研鑽に努力せること多年、：亜細亜の各地を通じて彼らが試みたる学術的研究の功績、真に驚歎すべきものあり。我が国の学者、また実に之に依頼し、東洋のこと西人の教を俟って始めて知るを得べしとす。吾人は西欧の学者に対して甚深なる尊敬と感謝との念を抱くと共に、吾人、東洋の国民が世界の学術に為すところ尠きを思ふて慚愧に堪えざるものあり。ただ満洲及び朝鮮に至りては、その地の僻遠なるため、西人の研究尚ほ未だ及ばざるところ多きが如し。然るに今や其の地、幸にして我が学界の前に開放せられ、而して之に對する我が国民の地理上及び文化上の關係は、其の研究に特殊の便宜

を与ふ。我が国の学者は、此の機を逸することなく、此の地方に於けるあらゆる事物の研究に力を尽し、其の成績を捧げて世界の学術に貢献せざるべからずや。

これらの言葉からは、西欧の学術に対する強烈な対抗意識をうかがうことはできるけれども、東洋の中で当然大きな比重を占めるべき中国の学術が意識から欠落している。もちろんこの片言をもつて白鳥の、さらには日本の東洋史学全般の傾向をただちに代表させることはできないであろうが、創生期の東洋史学が「非中国」の領域を意図的に包括しようとした結果、かえって中国及び中国の学術を適切に位置づけようとする意志が希薄になっていた側面があることは看過されるべきではない。

我が国の東洋学の視野から中国における研究が脱落した状態は、半世紀近くも続いた。例えば一九四〇年刊の青木富太郎『東洋学の成立とその発展』は以下のような構成を取っている。

- 第一篇 東洋学の成立
 - 第一章 中世までのヨーロッパ人の東洋に関する知識
 - 第二章 十三―五世紀のヨーロッパ人の東洋に関する知識
 - 第三章 東洋学の成立
- 第二篇 東洋学の発展
 - 第一章 支那研究

- 一、欧米人の支那研究
- 二、日本人の支那研究

第二章 満洲研究

(以下、蒙古研究、シベリア研究、中央アジア研究、西藏研究、インド研究も第一章と同様同様)

右の目次構成から明らかのように、近代日本における東洋学およびその一部門である東洋史学は、中国における学術研究を切り捨てた形で展開していったわけである。もちろん、これには多分に当時の日中両国の政治的背景が作用しており、とくに日中戦争勃発後に中国学界における成果を日本で評価することはきわめて困難な状況にあったことは言うまでもない。

一方、中国における学術状況はどうだったろうか。日本における中国研究(当時の言葉では支那学)は、中国では自国の文化研究、すなわち「国学」ということになる。一九二二年には胡適によって『国学季刊』が刊行され、一九二六年には顧頡剛『古史辨』の第一冊を刊行して、近代的学術研究としての「国学」が立ち上がるようになっていた。

しかしそこには、日本の東洋学が対象とする、中国も含めた「東洋」という視点は¹⁰⁾ない。その意味で、中国の学術には「東洋学」が存在していなかったと言える。したがって、中国を中心に据えながらも「東洋」という領域を志向する日本の学術と、あくまでも自国

の文化研究として深化する中国の国学との間には、埋めがたい隔絶が存在していたのである。

ここで誤解を避けるために付言すれば、この二つの学問動向の優劣、あるいは正否を論じたのではない。日中両国におけるそれぞれの中国研究の意味の相違が、両国の学術交流の場でどこまで意識されていたかが、問題なのである。同じ対象を研究しながら、そこにパラダイムの違いが存在するとき、単純な学術交流は情報交換以上の意義を持たないことになりかねない。事実、二十世紀前半の日中両国の学術は、研究者個人レベルでの盛んな交流にもかかわらず、相互に影響を与えることはきわめて少なく、交流の果実を得ることなく推移した、という結果に終わっている。

この相違は、日本における中国史研究が外国史研究である以上、解消することはできないであろう。それならば、その相違を活かすような学術交流の方法が模索されねばならない。その方法として現在筆者の脳裏にあるのは、「比較中国学」という方法である。¹¹⁾

筆者の専門とする中国古代史研究の場合、戦後まもなくの「論争の時代」から現在の個別研究の充実した集積にいたるまでの問題史の整理は、中国から視たときにどのように映るのであるか。日本の学界がなぜそれを問題とし、そこから何をくみ出そうとしたのかを外から評価することは、日本のみならず中国における歴史研究にとっても有益であるに違いない。¹²⁾

歴史研究が国によって様相を異にするという現状が望ましいこと

なのか、中国史研究はどの国で行われようとも結局同質のものになるべきなのか否か、筆者には判断がつかない。しかし、国による相違が厳然と存在している現在の学術体制の下で、昨今の盛んな国際学術交流を有益なものとするためには、それぞれの「中国学」を他者の目から比較する試みが為されてしかるべきであろう。それが一世紀前の日中学術交流史の状況から我々が学ぶべき方向ではあるまいか。

四

同様の問題は、日中文化交流史の研究にも該当する。

そもそも日中の文化交流といっても、前近代におけるそれは、中国から日本への一方的流入の歴史に他ならない。日本から中国への文化伝播は、明治末以降のことであり、それとて日本研究よりも日本を通しての西洋の摂取に比重があった。したがって、日中間の「交流」による相互作用を想定しても、それは顕在化してこないであろう。

それゆえ、日中文化交流史研究は「受容と変容」を中心軸として展開してきた。具体的には、いつ、誰が、どのような方法で、どのような文化要素を持ち込んだかが、詳細に解明されてきた。さらに、時代による日中の政治的関係の相違（外交関係の有無など）や東シナ海を舞台とする交易関係という経済的要素を変数に取り込みながら、各時代の文化交流の具体像が豊かに蓄積されてきた。

だが、そのような膨大な個別研究の蓄積にもかかわらず、¹³⁾「日中文化交流史」全体を通観する通史あるいは概説書は、まだ現れておらず、分野ごと、時代ごとの交流状況が個別に述べられているに過ぎない。¹⁴⁾日中交渉史といっても、そこで取り上げられるのは、中国史に現れた日本、日本史に現れた中国であり、極言すれば日中交渉史は、日本史と中国史それぞれからのプリコラーージュのごときものになつてゐるのではあるまいか。

現在の日中交渉史研究は、中国の研究者の増加に伴つて、一つのデイシプリンとして成立しつつある。今後、この研究が豊かな果実を手にするためには、ここでも「比較」の視点が有効であろう。一方から他方へある文化事象が伝播するとき、それを中国側から見た場合と日本側から見た場合とで、どのような相違が出てくるのか。こうした視角での取り組みはこれからの課題である。

さらに「伝わったもの」とともに「伝わらなかつたもの」への目配りも必要とならう。一例を挙げれば、古代日本の国家形成に中国唐王朝の律令はきわめて重要な意義を持ったが、日本においては唐令の受容と研究には多大の精力がそがれたのとは対照的に、唐律の受容には冷淡であつた。一方、中国では唐令は早くに散逸してしまふが、唐律は厳然として残り続ける。ここから、律と令が日中兩國の社会で持った意義の違いを導くことは容易であらう。また、一言で中国文化といつても、中国における文化の地域性を考慮に入れた場合、日本で受容されたものが中国のどの地域の文化なのか、と

いう視点からの探求は、まだ端緒に就いたばかりである。日中文化交流史研究は、本学東西学術研究所が伝統的に重視してきた研究領域であるが、将来においても本研究所が文化交流史研究の中心として機能し続けるためには、これらの困難ではあるが豊かな領域に踏み込んでいく必要があることは疑いあるまい。

注

- (1) 章炳麟「与羅振玉書」〔『学林』第一期、一九二一年〕。のち『太炎文録初篇』所収。
- (2) この章炳麟の公開書簡に対して内藤湖南は、一九二一年八月の講演で、批判の可否を論ずることは回避し、中国の学術的蓄積の広大さと論点を冷静に転換している。内藤湖南「支那学問の近状」〔『内藤湖南全集』第六卷所収〕。
- (3) 三宅米吉「文学博士那珂通世君伝」〔『那珂通世遺書』大日本図書、一九一五年〕。
- (4) この「東洋歴史」の構想ですでに「日本史」が除外されていることは、そもそもが「外国史」という科目の中での議論であることに由来するが、その後の日本の歴史研究に与えた影響は、きわめて重大であつたといえる。
- (5) 王国維の序文は、『桑原隲蔵全集』別冊に附された「月報六」所載の森鹿三「桑原先生と藤田博士」に全文の写真が掲載されている。
- (6) 『王国維全集・書信』中華書局、一九八四年。なお和文訳は井波陵一「王国維の国学―記憶よ、語れ。」〔狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』、京都大学学術出版会、二〇〇一年〕に拠つた。
- (7) 白鳥庫吉「戎狄が漢民族の上に及ぼした影響」〔『東洋哲学』八一、一九〇一年〕。
- (8) 白鳥庫吉『滿洲歴史地理』刊行の序、一九一三年。

- (9) 蛭雪書院、一九四〇年。なお序の中で著者は「日本のみならず、欧米諸国に於ける、支那を中心とする東洋に関する知識及び研究の発展の迹を辿ることは頗る興味のあることである。しかしこの方面の良著は至って少ない。しかも十九世紀以後に始まった科学的研究の迹を概観したものは、皆無と云っていい状態にある。更に又我が国に於ける東洋学即ち東洋研究は世界でも一流の水準に達してゐる。…我が国の東洋研究を更に発展せしめんがためには、各国学界の現状を知ること、更に我が国の現状をも知って、彼の長所を採ることが必要である。」と述べている。
- (10) 伝統中国で「東洋」という場合、それは中国の東、つまり日本を指すことになるが、ここで問題とするのは、現在の「東アジア」「北アジア」「東南アジア」「中央アジア」に相当するパミール以東のユーラシアのことである。
- (11) ジョシユア・フォーゲル「中国における伝統の創造と日本の貢献―崔述の場合」(狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』、二〇〇一年、京都大学学術出版会)で明らかにされた「崔東壁(一七四〇〜一八一六)再発見」の事例は、日中の比較中国学の試みとして、きわめて興味深い成果である。
- (12) 谷川道雄編著『戦後日本の中国史論争』(河合文化教育研究所、一九九三年)は、そうした問題史的整理の代表的な例である。
- (13) たとえば、井正敏・川越泰博編『日中・日朝関係研究文献目録』(国書刊行会、一九九六年増補)は、一九九一年までに日本語で書かれた文献を集めたものであるが、十九世紀中葉を下限とするものであるにもかかわらず、そこに収められた文献の数は八七六二件にのぼる。
- (14) 山根幸夫他編『近代日中関係史研究入門』(研文出版、一九九二年)の「総説」「一・概説書」の項には、「近代日中関係の通史としてとくに推薦できるものはない。」と記されている。

A Review of Academic Exchange between Japan and China

Takao Fujita

In this paper the author addresses several viewpoints to investigate cultural and academic exchange between Japan and China. In the latter half of nineteenth century, when Japan began to remodel herself into a modern nation-state, two trends of research for Chinese history emerged. One was Sinology, including Chinese philosophy and literature, and the other was Oriental history, not only for China proper but for Korea, Manchuria, Mongolia and Chinese Turkistan. In the same time, the traditional China set out to reform its regime, and some works of Japanese historians were translated into Chinese.

A new trend of Chinese history in Japan, however, seemed to have no interest for China for all that many scholars of China had intimate acquaintance with Japanese scholars. Therefore the development of Sinology in China during twentieth century had no relation to the rise of Orientalism in Japan. On the other hand, most of Japanese Orientalists at that time had great interest in the Orientalists in Europe as rivals in research, but seemed to be unconcerned with the historical achievements in China.

The academic exchange between Japan and China before World War II could not get over this difference in research paradigm and the author is afraid that current situation may be the same as one hundred years ago. One of hopeful approaches is, the author proposes, a foundation of comparative Sinology, which can take the difference of sinology between Japan and China into account.